

## 特集にあたって

東京大学史料編纂所 松井 洋子

近世長崎については、早くから県立長崎図書館、市立博物館などを中心に史料の収集・保存への取り組みがなされており、現在歴史文化博物館に収蔵されているそれらをもとに、活発な研究が行なわれてきた。しかし、長崎市中を構成する七〇余の個別町の史料に関して言えば、桶屋町の藤家文書、寄合町の諸事書上帳などがあげられるものの、必ずしもまとまった史料が多くあるとはいえない。

そうした中で、本特集で紹介する本石灰町乙名本山家文書は、近世後期の個別町の様子を示すものとして、また個別町の長として、さらに惣町のために働く乙名の活動を示すものとして価値が高い。

近代以降の諸経緯から、本山家の文書は現在、長崎歴史文化博物館収蔵の長崎県及び長崎市所蔵の文書の中に点在するほかに、東京大学史料編纂所が購入したもの、また本山家の親戚筋にあたる松浦家に伝えられ、現在史料編纂所に寄託されているもの、といくつかに分散して伝来している。それらについて、情報を集約し共有することで、長崎研究に資することはできないだろうか、という願いから、二〇二〇年度東京大学史料編纂所共同利用・共同研究拠点一般共同研究として「長崎市中「本石灰町乙名本山家文書」の研究資源化に向けた調査研究」(代表藤本健太郎)が開始された。

文書の来歴、共同研究の経緯については、藤本氏の解題、木村直樹氏の論考に詳しい。「長崎市史」編修委員であった福田忠昭氏による調査の経緯が明らかにされた点も、今後、「長崎学」の歴史を振り返るうえで、貴重な情報となるう。

コロナウィルスの感染拡大の時期に重なり、全員での史料調査はなかなか実現できなかったが、それぞれが分担部分の作業をし、またオンラインでの研究会で情報を共有するなどのかたちで、目録の作成と史料内容の検討を進めた。同じ史料群について皆で検討する楽しさは、何物にも代えがたいと改めて感じたところである。

こうして、所蔵の違いを超えて、目録点数にして一、四〇〇件を超える一つの史料群として「本山家文書」の詳細な統合目録を作成することができ、長崎市長崎学研究所のご厚意で『長崎学』第七号に掲載させていただく運びとなった。

また、本山家に伝わる幕末維新期からの古写真についても、史料編纂所技術専門職員谷昭佳氏の協力により、画像とともに目録として紹介することができた。谷氏の解題は、専門的立場から本山家伝来古写真の特性とその意義を明らかにするものとなっている。

本山家文書の全体に目を通すなかで各自が着目した史料の翻刻を中心とした、吉岡誠也氏、赤瀬浩氏、松井による史料紹介も、今後の研究の足掛かりとなるであろう。

目録を通覧することには、必要な史料を探すだけでなく史料群全体を見通す意味もある。特に、本山家文書のような異なる場所に分散していた史料においては、その一体としてのつながりは、目録の中にのみ再び立ち現れてくるのである。

ここに至るまでには、松浦家の現御当主松浦功氏、及び関係諸機関の皆様方に多くのお力添えをいただいた。あらためて感謝を申し上げたい。

本特集が、今後の研究がますます豊かになり、「長崎学」の伝統が新たな世代に引き継がれていくための、一つのきっかけとなることを願っている。